

自律社会へ、科学技術のフロンティア

今から半世紀以上前、「人類の進歩と調和」をテーマに大阪万博が開催された1970年、オムロン創業者であり立石科学技術振興財団の設立者である立石一真は、独自の未来予測理論「SINIC理論」を国際未来学会で発表した。

当時、間近に顕れ始めた情報化社会に留まらず、遠い未来へとスコープを拡げ、再び心や集団の価値を重視する豊かな社会「自律社会」の到来と、そこに向かうために必要な、工業文明社会の価値観の大転換と超克の時代「最適化社会」を、社会発展規範と数学的シミュレーションで大胆に予測していた。



2005年から始まると予測された最適化社会は、2007年に登場したiPhoneなどスマートフォンとアプリ、web 2.0やIoT、AIといった、サイバー空間とフィジカル空間、さらに一人ひとりの個人のバイタルデータや行動データ等を、広く見渡し細かくつなぐ、新しい統計理論や確率論のデータサイエンスによる最適化技術の発展によって、加速度的に社会革新を進めた。

しかし、従来の常識が通用しなくなるような社会システムの変化、気候変動や自然災害、新型コロナウイルスによるパンデミック等、想定を越えた、あるいは想定外のアクシデントも日増しに増えつつある。まさに、「渾沌と葛藤の時代」と位置づけられた、フォーキャストとバックキャストをつなぐ接面上の最適「化」、トランジション社会の渦中である。

そのSINIC理論では、2025年には「最適化社会」の大転換を抜けて「自律社会」が始まると予測されている。あと2年間で本当に自律社会はスタートするのだろうか？

最大の障害となるのは、たぶん私たち人間自身の変化を嫌うメンタリティであろう。確かに、物、情報、カネ、エネルギーの流れは、制御技術によって最適化を進めてきた。しかし、その上でこの先の未来に必要なのは、人間ならではの感情、意識の自律である。これは、他者や外側から強いる制御でなく、個々の内発的、自律的な生き方の発現によるべきものであり難しい。自律的に一人ひとりの力を存分に発揮しつつ、つながり合って実現される豊かな社会こそ「自律社会」の到来と言える。

では、どうすべきか？今なお、強力な慣性力を働かせる工業社会パラダイムは、自律人としての変容、すなわち「自立」、「連携」、「創造」という三要件を満たす人間への変容を妨げているかのようだ。なかなか物、個、カネ中心、短期思考で量的拡大中心の豊かさからのシフトは思うように進まない。

しかし、人が変化を嫌う性向を持つのは当然だ。ならば、人間の内発的、自律的変容を介助する技術こそが、新たなソーシャルニーズ創造につながるはずだ。そこで、自律社会への新たな社会革新技術として、心や身体に寄り添い働きかける「精神生体技術」の開発が期待される。

これまでの技術が「Cure（不具合を治す）型技術」として価値を発揮してきたのに対して、これからは「Care（気にかけて後押しする）型技術」が求められることになるだろう。

そのようなスコープで科学技術のフロンティアを見渡すと、確かにその予兆は脳神経科学やバーチャル技術の中に見て取れる。そして、人の心に作用する技術へと踏み出すからには、これまで以上に倫理的な観点からの技術評価も大きな意味を持ち始める。まさに、ELSI（倫理的、法的、社会課題）と呼ばれる文理相互作用による研究開発時代の到来である。未来に向けて、科学技術の振興は新たなフロンティアを拓く時にある。

そして奇しくも 2025 年、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに再び大阪・関西万博が開催される。情報社会の入口にあった「文明の進歩」から半世紀を経て、自律社会の入口でのテーマは「いのちの輝き」である。まさに、一人ひとりが力を存分に発揮してコンヴィヴィアル（自立共生、共働的）な社会に向かうためのテーマに他ならない。さあ、自律社会へ、そして、さらにその先の社会を創造するためにも、科学・技術・社会の相互円環的な発展動力を加速させよう。

株式会社ヒューマンルネッサンス研究所 中 間 真 一（理事）
エグゼクティブ・フェロー